

核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)
2017年ノーベル平和賞受賞講演
2017年12月10日
ノルウェー・オスロ
ベアトリス・フィン氏とサーロー節子氏による*

ベアトリス・フィン

陛下、
ノルウェー・ノーベル委員会の皆さま、
尊きご来賓の皆さま、

本日、2017年ノーベル平和賞を核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）を構成する何千人もの刺激的な人々を代表して受け取ることは大変な光栄です。

私たちは共に、軍縮に民主主義をもたらし、国際法の新たな形を作り出しました。

==

私たちは、ノルウェー・ノーベル委員会が私たちの活動を認め、この重要な運動に機運を与えてくださったことに、かしこまり感謝申し上げます。

私たちは、この運動に惜しみなく時間とエネルギーを費やしてきてくださった人々を称えます。

私たちは、共通の目標に向けて前進するために私たちと連携して取り組んでこられた勇気ある外務大臣、外交官、赤十字・赤新月スタッフ、国連職員、学者・専門家の皆さまに感謝します。

そして私たちは、この恐ろしい脅威を世界から取り除くことを誓っているすべての人々に感謝します。

==

私たちの陸地の中に埋設されたミサイル発射台や、私たちの海の中を潜行する潜水艦や、私たちの空を高く飛ぶ航空機など、世界中の数十カ所に、人類を破壊する1万5000個もの物体が置かれています。

おそらく、この事実があまりに非道であり、それがもたらす結末が想像を超えるほどの規模のものであるがゆえに、多くの人々はこの残酷な現実をただ受け入れてしまっているようです。私たち全員を取り巻くこの異常な道具について考えることなく、日々の暮らし

* これはピースボートによる非公式訳であり、英語の原文（以下のリンク）の著作権は
© THE NOBEL FOUNDATION, STOCKHOLM, 2017 にある
https://www.nobelprize.org/nobel_prizes/peace/laureates/2017/ican-lecture_en.html

をおくるためにです。

このような兵器に私たちが支配されることを許していることこそ、異常です。私たちの運動を批判する人たちは、私たちは非理性的で、現実に基づかない理想主義者であると言います。核武装国は決して彼らの兵器を手放さないと。

しかし私たちは、唯一の理性的な選択を示しています。私たちは、核兵器をこの世界の定着物として受け入れることを拒否し、自分たちの運命が数行の発射コードによって束縛されていることを拒否する人々を代表しています。

私たちの選択こそが、唯一、可能な現実です。他の選択は、考慮に値するものではありません。

核兵器の物語には、終わりがあります。どのような終わりを迎えるかは、私たち次第です。

核兵器の終わりか、それとも、私たちの終わりか。

そのどちらかが起こります。

唯一の理性的な行動は、突発的なかんしゃくによって私たちが相互に破壊されてしまうような状況の下で生きることを止めることです。

==

今日私は、三つのことについてお話ししたいと思います。恐怖、自由、そして未来についてです。

核兵器を保有する者たち自身が認めているように、核兵器の真の効用とは恐怖を引き起こす力を持つことです。核兵器を支持する者たちが「抑止」効果について語る時、彼らは恐怖を戦争の兵器として称えています。

彼らは、無数の人間を一瞬で皆殺しにすることの準備ができていると宣言し、威張る仕草をみせています。

ノーベル文学賞受賞者のウィリアム・フォークナーは1950年の受賞にあたり「唯一ある問いは『いつ私は爆破されるか』だ」と述べました。しかしそれ以来、この普遍的な恐怖は、さらに危険なものに取って代わられました。それは否認です。

瞬時に世界が終末を迎えるハルマゲドンの恐怖は去り、核抑止論の正当化に使われた世界両ブロックの均衡は終わり、核シェルターはなくなりました。

それでも一つ残ったものがあります。私たちにその恐怖を与えてきた何千何万という核兵器そのものです。

核兵器が使われるリスクは、今日、冷戦が終わったときよりも大きくなっています。しかし冷戦時とは違って、今日、世界にはより多くの核武装国があり、テロリストもいれば、サイバー戦争もあります。これらすべてが、私たちの安全を脅かしています。

目をつむってこのような兵器との共存を受け入れることは、私たちの次なる大きな過ちとなります。

恐怖は、理性的なものです。この脅威は、現実のものです。私たちが核戦争を回避してこられたのは、分別ある指導力に導かれたからではなく、これまで運がよかったからです。私たちが行動しなければ、遅かれ早かれ、この運は尽きます。

一瞬のパニックや不注意、誤解された発言、また傷つけられた自尊心が、いともたやすく私たちの全都市を不可避的に破壊してしまいます。計画的な軍事エスカレーションが、一般市民の無差別大量殺戮を引き起こします。

今日世界に存在する核兵器のごく一部が使われただけでも、火災旋風の煤煙が大気圏高くに届き、地球の表面に十年以上にわたり冷却、暗黒と乾燥をもたらします。

それは食料作物を消し去り、何十億もの人々を飢餓の危機にさらします。

それにもかかわらず、私たちは、このような私たちの存在そのものに対する脅威を否認しながら生きているのです。

フォークナーは、ノーベル賞講演の中で、彼に続く者たちに向けられた課題についても語っています。彼は、人類の声によってのみ、私たちは恐怖に打ち勝ち、人類が持続することを可能にすると語りました。

I CANのつとめは、そのような声となることです。人類および人道法の声となること。一般市民を代表して声を上げること。その声を人道的観点から上げることによって、私たちは、恐怖を終わらせ、否認を終わらせることができます。そして最終的に、核兵器を終わらせることも。

==

ここで二点目の自由についてお話ししたいと思います。

核戦争防止国際医師会議（IPPNW）は、核兵器に反対する団体として初めてノーベル平和賞を受賞した1985年、この壇上で次のように述べました。

「私たち医師は、全世界を人質に取るという無法行為に抗議する。私たちが自らの絶滅に向けてお互いを標的にし続けているという道徳違反に抗議する」

これらの言葉は、2017年においてもまさに響いています。

差し迫る絶滅の人質にとらえられたまま生きることを止める。その自由を、私たちは取り戻さなければなりません。

男たちは――女たちではなく！――他者を支配するために核兵器を作りました。ところが実際には、私たちが核兵器に支配されてしまっています。

彼らは私たちに間違った約束をしました。それは、核兵器を使うことの結末をあまりにも恐ろしいものにするによって、紛争を望ましくないものにする事ができると。それにより、私たちは戦争から自由になれると。

しかし核兵器は、戦争を防ぐどころか、冷戦期のあいだ何回にもわたり私たちが崖っぷちに追い込んできました。そして今世紀においても、核兵器は私たちが戦争や紛争に突き進めようとしています。

イラクでも、イランでも、カシミールでも、北朝鮮でも、核兵器の存在は、核競争への参加へと他者を駆り立てています。核兵器は私たちが安全にするどころか、紛争を生み出しています。

私たちと同じノーベル平和賞受賞者であるマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師が1964年にまさにこの壇上から述べたように、核兵器は「大量虐殺的でありかつ自殺的な」兵器であります。

核兵器とは、血迷った男が私たちのこめかみにたえず銃を突きつけているようなものです。核兵器は私たちが自由にするとされてきましたが、実際には、私たちの自由を否定しています。

核兵器による支配は、民主主義に対する侮辱です。しかし、これらは単なる兵器です。単なる道具です。これらの兵器が地政学的理由から創造されてきたのとまさに同じように、これらの兵器を人道的観点の下に置いて廃棄していくことは簡単なことです。

==

これこそICANが自らの任務とするところであり、私のお話の三点目すなわち未来に向かう道であります。

私は本日、核戦争の恐ろしさを証言することを自らの人生の目的としてきたサーロー節子さんと共にこの壇上に立っていることを光栄に感じています。

彼女そして被爆者たちは、この核兵器の物語の始まりを経験しました。私たち皆に課せられた課題は、彼らがこの物語の終わりをその目で見ることができるようになることです。

彼らは、自らの悲痛な過去を何度もくり返し再現してきました。それによって私たちが

よりよい未来を作り出すことができるようにするためにです。

何百もの団体が I C A N に加わり、未来に向けた力強い歩みを進めています。

世界中で何千人ものキャンペーナーたちが、日々たゆみなく、その課題に立ち向かっています。

地球上で何百万もの人たちが、これらキャンペーナーと肩を組んで彼らを支え、さらに何億人もの人たちに対して、今とは違う未来は真に可能であることを示してきました。

そのような未来は不可能だという人たちは、それを現実にしようとしている人々の道をふさぐのを止めるべきです。

普通の人々の行動により、これら草の根の努力の頂点として今年、これまで仮説だったものが現実へと前進しました。核兵器という大量破壊兵器を違法化する国連条約が、122カ国により交渉され妥結したのです。

核兵器禁止条約は、この世界的な危機の時にあって、未来への道筋を示しています。それは、暗い時代における一筋の光です。

そしてさらに、それは私たちに選択を与えています。

二つの終わりのどちらをとるかという選択です。核兵器の終わりか、それとも、私たちの終わりか。

前者の選択を信じることは、愚かなことではありません。核を持つ国が武装解除できると考えることは、非理性的なことではありません。恐怖や破壊よりも生命を信じることは、理想主義的なことではありません。それは、必要なことに他なりません。

==

私たち全員が、この選択を迫られています。そして私は、すべての国に、核兵器禁止条約に参加することを求めます。

米国よ、恐怖よりも自由を選びなさい。

ロシアよ、破壊よりも軍備撤廃を選びなさい。

イギリスよ、圧制よりも法の支配を選びなさい。

フランスよ、テロよりも人権を選びなさい。

中国よ、非理性よりも理性を選びなさい。

インドよ、無分別よりも分別を選びなさい。

パキスタンよ、ハルマゲドンよりも論理を選びなさい。

イスラエルよ、抹殺よりも良識を選びなさい。

北朝鮮よ、荒廃よりも知恵を選びなさい。

核兵器の傘の下に守られていると信じている国々に問います。あなたたちは、自国の破壊と、自らの名の下で他国を破壊することの共犯者となるのですか。

すべての国に呼びかけます。私たちの終わりではなく、核兵器の終わりを選びなさい。

この選択こそ、核兵器禁止条約が投げかけているものです。この条約に参加しなさい。

私たち市民は、偽りの傘の下に生きています。核兵器は私たちを安全になどしていません。核兵器は私たちの土地や水を汚染し、私たちの体に毒を与え、私たちの生きる権利を人質に取っているのです。

世界のすべての市民に呼びかけます。私たちと共に、あなたの政府に対して、人類の側に立ち核兵器禁止条約に署名するよう要求してください。私たちは、すべての国の政府が理性の側に立ちこの条約に参加するまで活動し続けます。

==

今日、化学兵器を保有することを自慢する国はありません。

神経剤サリンを使用することは極限的な状況下であれば許されると主張する国もありません。

敵国に対してペストやポリオをばらまく権利を公言する国もありません。

これらは、国際的な規範が作られて、人々の認識が変わったからです。

そして今、ついに、私たちは核兵器に対する明確な規範を手にしました。

歴史的な前進への一歩は、普遍的な合意で始まることはありません。

署名する国が一つずつ増えて、年を重ねるごとに、この新しい現実は確固たるものとなります。

これこそが進むべき道です。核兵器の使用を防ぐには、ただ一つの道しかありません。核兵器を禁止し廃絶することです。

==

核兵器は、これまでの化学兵器、生物兵器、クラスター爆弾や地雷と同様に、今や違法

となりました。その存在は非道徳です。その廃絶は、私たちの手の中にあります。

終わりが来るのは避けられません。しかしそれは、核兵器の終わりか、それとも、私たちの終わりか。私たちは、そのどちらかを選ばなければなりません。

私たちのこの運動は、理性を求め、民主主義を求め、恐怖からの自由を求める運動です。

私たちは、未来を守るために活動する468団体のキャンペーナーです。私たちは、道義上の多数派の代表者です。死よりも生を選ぶ数十億人の代表者です。私たちは共に、核兵器の終わりを見届けます。

ありがとうございました。

サーロー節子

陛下、
ノルウェー・ノーベル委員会の皆さま、
この場にいる、また世界中の仲間のキャンペーナーの皆さん、
皆さま、

この賞をベアトリスと共に、I CAN運動にかかわる類い希なるすべての人たちを代表して受け取ることは大変な光栄です。皆さんお一人お一人が、核兵器の時代を終わらせることは可能であるし、私たちはそれを成し遂げるのだという大いなる希望を与えてくれます。

私は、広島と長崎の原爆投下から奇跡的に生き延びた被爆者の一人としてお話をします。私たち被爆者は、70年以上にわたり、核兵器の完全廃絶のために努力をしてきました。

私たちは、世界中でこの恐ろしい兵器の生産と実験のために被害を受けてきた人々と連帯しています。長く忘れられてきた、モルロア、エッケル、セミパラチンスク、マラリンガ、ビキニなどの人々と。その土地と海を放射線により汚染され、その体を実験に供され、その文化を永遠に破壊させられた人々と。

私たちは、被害者であることに甘んじることはありませんでした。私たちは、世界が激しく爆発して終わることも緩慢に毒に犯されていくことも受け入れませんでした。私たちは、大国と呼ばれる国々が私たちを核の夕暮れからさらに核の深夜へと無謀にも導いて行こうとする中で、恐れの中でただ無為に座していることを拒みました。私たちは立ち上がったのです。私たちは、自らが生き延びてきた物語を分かち合いました。そして言いました。人類と核兵器は共存できないと。

今日私は皆さんに、この会場において、広島と長崎で非業の死を遂げたすべての人々の存在を感じていただきたいと思います。皆さんに、私たちの上にそして私たちの周りに、25万人の魂の大きな固まりを感じ取っていただきたいと思います。その一人ひとりには名前がありました。一人ひとりが、誰かに愛されていました。彼らの死を無駄にしてはな

りません。

私が13歳の時、米国が最初の核兵器を私の暮らす広島に落としました。私は今でも鮮明にその朝のことを覚えています。8時15分、私は窓から目をくらす青白い閃光を見ました。私は、宙に浮く感じがしたのを覚えています。

静寂と暗闇の中で意識が戻ったとき、私は、自分が壊れた建物の中で身動きがとれなくなっていることに気がつきました。私の同級生たちが「お母さん、助けて。神様、助けてください」とかすれる声で叫んでいるのが聞こえ始めました。

そのとき突然、私の左肩を触る手があることに気がつきました。その人は「諦めるな、踏ん張れ。私が助けてあげるから。あの隙間から光が入ってくるのが見えるだろう？そこに向かって、なるべく早く、はって行きなさい」と言うのです。私はそこからはい出てみると、崩壊した建物は燃えていました。その建物の中にいた私の同級生のほとんどは、生きたまま焼き殺されていきました。私の周囲全体には異常な、想像を超えた破壊がありました。

幽霊のような姿の人たちが、足を引きずりながら行列をなして歩いていきました。恐ろしいまでに傷ついた人々は、血を流し、火傷を負い、黒こげになり、膨れあがっていました。体の一部を失った人たち。肉や皮が体から垂れ下がっている人たち。飛び出た眼球を手を持っている人たち。お腹が裂けて開いている人たち。そこから腸が飛び出て垂れ下がっている人たち。人体の焼ける悪臭が、そこら中に蔓延していました。

このように、一発の爆弾で私が愛した街は完全に破壊されました。住民のほとんどは一般市民でしたが、彼らは燃えて灰と化し、蒸発し、黒こげの炭となりました。その中には、私自身の家族や、351人の同級生もいました。

その後数週間、数カ月、数年にわたり、何千人もの人たちが、放射線の遅発的な影響によって、次々と不可解な形で亡くなっていきました。今日なお、放射線は被爆者たちの命を奪っています。

広島について思い出すとき、私の頭に最初に浮かぶのは4歳の甥、英治です。彼の小さな体は、何者か判別もできない溶けた肉の塊に変わってしまいました。彼はかすれた声で水を求め続けていましたが、息を引き取って苦しみから解放されました。

私にとって彼は、世界で今まさに核兵器によって脅されているすべての罪のない子どもたちを代表しています。毎日、毎秒、核兵器は、私たちの愛するすべての人を、私たちの親しむすべての物を、危機にさらしています。私たちは、この異常をこれ以上許してはなりません。

私たち被爆者は、この苦しみと、生き残るためまた灰の中から自らの人生を立て直すための険しい闘いの中で、この世に終わりをもたらす核兵器について世界に警告しなければならないと確信しました。そしてくり返し、私たちは証言をしてきました。

それにもかかわらず、広島と長崎の残虐行為を戦争犯罪と認めない人たちがいます。彼らは、これは「正しい戦争」を終わらせた「よい爆弾」だったというプロパガンダを受け

入れています。この神話こそが、今日まで続く悲惨な核軍備競争を導いているのです。

今日9カ国は、全都市を燃やし尽くし、地球上の生命を破壊し、この美しい世界を将来世代が暮らしていけないものにする脅し続けています。核兵器の開発は、国家の偉大さが高まることを表すものではなく、国家が暗黒の淵へと墮落することを表しています。核兵器は必要悪ではなく、絶対悪です。

今年7月7日、世界の圧倒的多数の国々が核兵器禁止条約を投票により採択したとき、私は喜びで感極まりました。かつて人類の最悪のときを目の当たりにした私は、この日、人類の最良のときを目の当たりにしました。私たち被爆者は、72年にわたり、核兵器の禁止を待ち望んできました。これを、核兵器の終わりの始まりにしようではありませんか。

責任ある指導者であるなら、必ずや、この条約に署名するでしょう。そして歴史は、これを拒む者たちを厳しく裁くでしょう。彼らの抽象的な理論は、それが実は大量虐殺に他ならないという現実をもはや隠し通すことができません。「抑止」論なるものは、軍縮を抑止するものでしかないことはもはや明らかです。私たちはもはや、恐怖のキノコ雲の下で生きることはしないのです。

核武装国の政府当局者、そして「核の傘」なるものの下の共犯者たちに申し上げたい。私たちの証言を聞き、私たちの警告を心に留めなさい。そうすれば、必ずや、あなたたちは行動することになることを知るでしょう。あなたたちは皆、人類を危機にさらしている暴力システムの不可欠の一部分なのです。私たちは皆、悪の凡庸さに気づかなければなりません。

世界のすべての国の大統領や首相たちに懇願したい。核兵器禁止条約に参加し、核による絶滅の脅威を永遠に除去してください。

私は13歳の少女だったときに、くすぶる瓦礫の中に捕らえられながら、踏ん張って、光に向かって動き続けました。そして生き残りました。今、私たちの光は核兵器禁止条約です。この会場にいるすべての皆さんと、これを聞いている世界中のすべての皆さんに対して、広島の廃墟の中で私が聞いた言葉をくり返したいと思います。「諦めるな。踏ん張れ。光が見えるだろう？そこに向かってはって行け。」

今夜私たちがオスロの街をたいまつを灯して行進するにあたり、核の恐怖の闇夜からお互いを救い出しましょう。どのような障害に直面しようとも、私たちは動き続け、踏ん張って、この光を分かち合い続けます。この光は、この一つの尊い世界が生き続けるための私たちの情熱であり、誓いなのです。